

小松城跡発掘調査報告書

2011.3

石川県小松市教育委員会

例 言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した小松城跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、小松市教育委員会文化施設室、出土品整理・報告書刊行は、小松市立博物館の依頼により、担当課事業費で実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財並びに、調査地、調査原因、調査面積、調査期間、調査担当は次のとおりである。

【小松城跡】

《調査地》 小松市丸の内公園町19番地

《調査原因》 (仮称) 芦城公園内収蔵庫建設事業

《調査面積》 約200m²

《調査期間》 2009. 10. 27 ~ 2009. 12. 9

《調査担当》 川畠謙二

4. 発掘調査は、(社)小松市シルバー人材センターに作業員を委託した。遺構の実測は、担当者が行った。ただし、石垣の測量については、日本海測量(株)に委託して行った。
5. 出土品整理及び報告書作成は、平成22年度事業として川畠が担当した。遺物のトレースについては、宮田明の協力を受けた。
6. 写真撮影については、遺構・遺物とも担当者が実施した。
7. 本書の執筆及び編集については、川畠が担当した。
8. 本調査において出土した遺物及び遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
9. 現地調査から報告書刊行に至るまでには、下記の機関・個人等の協力を賜った。記して謝意を表する。　岡崎晋明・関戸信次・滝川重徳・富田和氣夫・藤田邦雄

凡 例

1. 本書に示す座標は世界測地系(VII系)に準拠している。
2. 本書で示す方位は、全て座標北である。水準高は海拔高(T.P.)で示している。
3. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。

目 次

例言・凡例・目次

報告書抄録

第Ⅰ章 位置と環境

第1節 遺跡の位置及び地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1

第Ⅱ章 調査に至る経緯等と調査履歴

第1節 調査に至る経緯等	4
第2節 調査の経過	4
第3節 既往の調査	5

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 発見された遺構	6
第2節 出土遺物	12

第Ⅳ章 まとめ

報告書抄録

ふりがな	こまつじょうあとはくつちょうさほうこくしょ
書名	小松城跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
編・著者名	川畠謙二
編集機関	石川県小松市教育委員会
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地 TEL(0761)22-4111
発行年月日	西暦2011年3月31日

第Ⅰ章 位置と環境

第1節 位置及び地理的環境

報告遺跡は、小松市丸内町地内及び、丸の内公園町地内に位置する。小松市は石川県南西部位置し、現在、人口約11万人を擁する県下第3の都市である。市域は面積371.13km²を測り、南縁部は大日山（標高1368m）で福井県勝山市との県境があり、東縁部・北縁部は白山市・能美市、西縁部は加賀市や日本海に接している。地形は大きく北西部の砂丘・平野と、市域の大部分を占める南東部の能美江沼丘陵・能美山地などに分かれ。全長約42km、流域面積271㎢を測り、県下第3位の流域面積を誇る梯川が市域を流れ、下流域の沖積平野上には市街地が形成されている。梯川は、白山山系の大日連峰を源に発し、西俣川、大杉谷川、郷谷川、津上川、鍋谷川、八丁川などが合流して日本海に注いでいる。

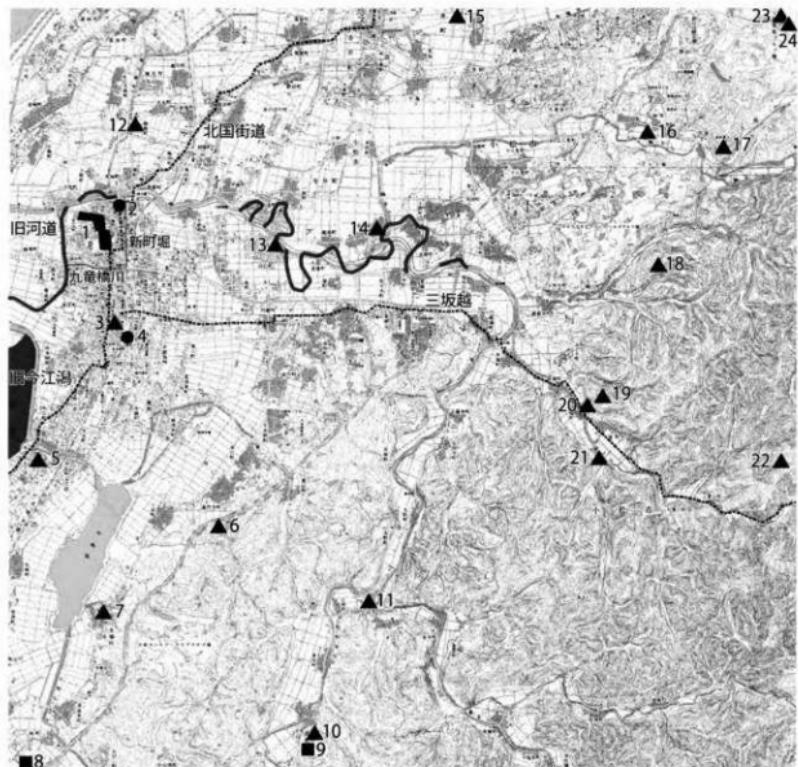
小松城跡は、昭和の河川改修以前の梯川が、南へ大きく屈曲した箇所の左岸側に接して位置する。河川自体を北方及び西方の堀として利用したものである。新町堀や九竜橋川が東と南の外郭線を示している。城と外郭線の間に、侍屋敷、町屋、寺院が計画的に配され、主要幹線道路である北国街道をも取り込む形で城下町を形成している。一方、梯川は、3km下流の河口にある安宅湊と直結し、さらに前川を通じて加賀三湖とも通じており、城は水上交通及び陸上交通を抑える要地に位置している。この江戸前期の地形改変及び地割が、基本的には現在も踏襲されている。なお、近世城郭化以前の地形は不明であるが、微高地状の部分と砂や泥土が堆積した部分が併存していたと、堀底土の状況から推察される。明治に城が破却された時に、ほとんどの堀は埋め立てられ、城内は耕地化された。現在では宅地化が進み、当時の面影は本丸櫓台石垣付近のみに見ることが可能。また、かつて泥町と呼ばれた街道沿いの町屋部分も、嵩上げ工事が進んでいる。当時の生活面は、遺構確認面から推察すれば、標高1.0~1.5m前後である。

第2節 歴史的環境

小松市の歴史に城郭が登場するのは、「太平記」に見える「那多城」からであり、南北朝期と早い段階である。軍記物の記載であるが、山城の発生時期にあたる。北朝側の富樫高家が築いた城とされている。ただし、その推定地の標高は低く、当該期の比高差の高い山城の特徴とは合致しない。那谷寺そのものに陣取ったのか、より南方に所在する鞍掛山や三童子城などを想定すべきかもしれない。また、平野部では、嘉吉元年（1441）頃から史料に名が見える本折氏の城館「本折城」が存在していた可能性がある。文明6年（1476）には、富樫正親と弟幸千代が守護の座を争いに真宗門徒が加担した文明の一揆において、幸千代方の拠点であった蓮台寺城の名が「白山宮莊蔵講中記録」に見える。この頃には、守護や有力国人層の城が造られていた可能性がある。長享2年（1488）の長享の一揆を経て、一揆勢が加賀の実権を握ったころには、城郭寺院とみられる波佐谷松岡寺が既に存在していたようだ。永正3年（1506）の永正の一揆以降、越前朝倉氏との緊張関係のなかで、一揆方城郭が構築されていったともいわれているが、実態は不明である。永禄7年（1564）の朝倉義景の加賀侵攻では、「本折口・小松口合戦」（広瀬文書）や「御幸塚平定」（当国御陣之次第）とあり、



第1図 小松市の位置



第2図 小松城跡と周辺の城館等の位置 (1 / 75,000)

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名称	種別	時代・備考	番号	遺跡名称	種別	時代・備考
1	小松城跡	城跡	中世・近世	13	白江堡跡	堡跡	中世
2	大川道跡	町屋跡・旧街道	中世・近世 (小松城下町)	14	千代城跡	城跡	中世
3	本折城跡	城跡	中世	15	和田山城跡	城跡	中世
4	幸町道跡	集落跡	中世 (本折城関連集落)	16	和気公文屋敷跡	城館跡?	中世
5	御幸塚跡	城跡	中世	17	虚空藏城跡	城跡	平安
6	躑躅台寺城跡	城跡	中世	18	鶴川堡跡	堡跡	室町
7	池田城跡	城跡	中世	19	岩測城跡	城跡	中世
8	林超勝寺跡	寺院跡	中世、推定地	20	小山城跡	城跡	中世
9	波佐谷城跡	城跡	中世	21	仏ヶ原城跡	城跡	中世
10	伝波佐谷松岡寺跡	寺院跡	中世、推定地	22	岩倉城跡	城跡	中世
11	江指城跡	城跡	中世	23	旭台北村	村跡	中世
12	御館遺跡	城館跡?	中世	24	旭台南村	村跡	中世

これらの地には、一揆方の城郭があった可能性もあり、中世小松城が存在したのだろうか。天正3年（1575）以降、織田信長勢の侵攻を受けた頃には、現在確認できる多くの山城が構築ないし整備されたと考えられている。確認調査を行った波佐谷城では、当該期の遺物が最も多い。ただし、調査された山城では、それ以前の遺物が確認される傾向にあり、波佐谷城や虚空蔵山城では加賀焼が出土しており、一向一揆以前の姿も考慮しなければならない。天正7年（1579）には、柴田勝家が安宅・本折・小松町口まで焼き払ったと『信長公記』にあり、小松城は勝家勢の城となったようである。よって、この時に織豊系城郭に改修された可能性も指摘されている。天正11年（1583）に、柴田勝家が滅ぼされた後、前田利家が小松城を接収し、堀秀吉に渡した記載があり、小松城の初見である。その後、越前及び南加賀二郡を領有したこととなった越前北庄城主丹羽長秀の与力、村上頼勝が新たな小松城主となった。

慶長3年（1598）に越後本庄へ転封となるまで、15年間能美郡の支配をおこなった。村上氏の転封後、丹羽長重が小松城主となるが、関ヶ原合戦後改易となり、2年程の在城であった。この前田氏以前の時代において、信長の安土城や秀吉の大坂城を頂点とする拠点城郭化が指向され、小松城も小松町や本折といった町場・手工業・商業地を取り込むかたちでの改修が行われた可能性も考えられている。しかし、大川遺跡（小松市調査分）の調査において、現状では17世紀より古い遺物は確認されていない。よって、少なくとも小松城跡北東部の区域の城下町化は、近世以降と考えられる。

小松城は、慶長5年（1600）年より前田氏の領有するところとなり、城代が置かれている。寛永15年（1638）の一国一城令により、一旦廃城となったと考えられるが、翌16年に加賀藩三代藩主前田利常が小松城を隠居城とし隠居することを幕府に許可される。翌17年には、小松城に入城し万治元年（1658）まで在城することになった。この時に、城の縄張りから城下町まで含めて一新され、城下町小松の基礎が出来上がった。正保2年（1645）に四代光高が急死したあと、小松城が藩政の実質的な中心地となった。なお、調査区である現三の丸は、少なくとも承応元年（1652）の絵図段階でも「三の丸」となっておらず、現二の丸が「三の丸」である。よって、三の丸の城門などが整備されたのは、「三の丸」と標記され石垣の表現がある寛文7年（1667）絵図までの間と考えられる。ただし、今回確認した、堀護岸の石垣は、最後まで絵図に描かれることはなかった。

利常の死後、五代綱紀が小松城を相続し、多くの家臣が金沢へと帰還する。小松城には、城代、城番が置かれ、一時期城代は廃止されるが、明治維新まで続くこととなる。幕末には、財政難であった加賀藩によって、明治6年（1873）の廢城令を待たずに、その取り壊しが指向されている。明治5年三の丸に小松懇役場が金平より移設されると、土地改良事業へ服役者の労役が宛がわれ、城郭はそのほとんどが破壊されてしまった。その後、行政の中心部として発展し、開発の余波をうけて、その面影を消しつつある。しかし、最近の試掘調査等により、場所によっては在りし日の姿を地下に留めているところもあり、埋蔵文化財調査のみがその姿を知る有効な手段であると言えよう。

引用参考文献

- 新修小松市史編集委員会 1999 「新修小松市史資料編1 小松城跡」 石川県小松市
- 石川県教育委員会・(財)石川県立埋蔵文化財センター 2007 年『小松市小松城跡』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2002 『第12回企画展 戦国大名朝倉氏その戦いの軌跡をさぐる』

第Ⅱ章 調査に至る経緯等と調査履歴

第1節 調査に至る経緯等

小松市の博物館や美術館において、美術品の大量寄贈や購入により、各施設の収蔵限界を超えた状態が続いていた。そこで新たな収蔵庫の建設事業が計画され、芦城公園内の公園管理事務所地が候補地となった。

予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である「小松城跡」の三の丸内に該当することから、平成20年10月28日付けで埋蔵文化財の取扱いについての協議書が担当課(文化施設室、当時)より提出された。翌日付けで、試掘調査が必要との内容で回答書を出している。その後、前述の管理事務所の移転工事や、市長の交代などもあり、平成21年6月3日付けになって試掘調査の実施依頼が提出された。予定地については、三の丸南側の堀部分に該当している。しかし、既に管理事務所が建てられおり、絵図等にも施設の記載がなく、遺構が検出される見込みが薄いとみされていた。さらに、小松城自体が、明治5年に三の丸に設置された小松懲役場の囚人により大々的に取り壊されたという歴史を経ているため、その傾向により傾倒する結果となった。試掘は、8月10日に実施された。その結果、工事予定区域内から三の丸堀及び護岸石垣が検出された。よって、埋蔵文化財の破壊が免れない場合は発掘調査が必要との通知を平成21年8月12日付けで行った。

その後、絵図にない石垣という重要性から、現状保存を視野に入れ、担当課との協議を開始した。収蔵庫建設自体も、貴重な寄贈美術品の適正保存という緊急に迫られた事業であったことから、両者を両立させる方向で協議を行った。その結果、建築物を2m北方へ動かすことで、城下側石垣を保存し、場内側石垣は設計GLを50cm高くすることで、石垣への影響範囲を1段目のみとし、2段目以降を現状保存とすることになった。その後、平成21年9月17日付けで発掘調査の実施依頼書が担当課より提出される運びとなった。

平成21年10月8日付けで、石川県教育委員会へ「土木工事のための発掘通知」を進呈し、発掘調査報告を同年10月13日付けで提出している。

調査費については、出土品整理費も含めて小松市が負担している。

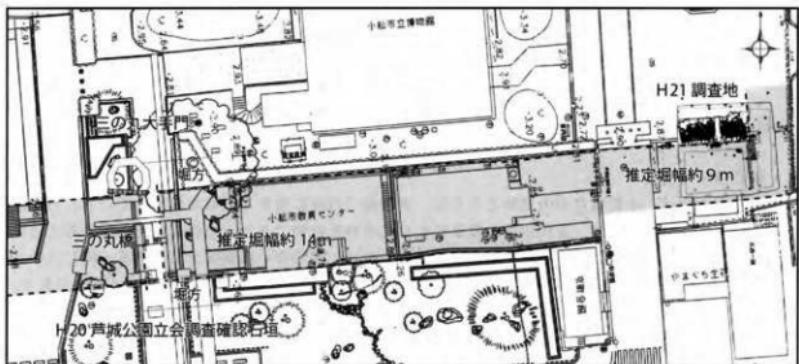
第2節 調査の経過

1. 調査の概要

調査区は、三の丸の南東隅部に該当する。表土については、重機により除去を行った。その際、調査対象深度までの埋土が、表土と同質の建設残土で埋め立てられており、人力での掘削が不可能な硬さに転圧されていたことから、そのまま重機により、慎重に剥ぐこととした。その後、人力による遺構及び石垣検出作業を行った。その結果、城内側南面及び東面と、堀を横断する三つの石垣が検出されている。その内、堀横断石垣については、近現代以降と判断されたため、略測のみに止めている。その他の石垣の測量及び1段目除去作業は日本海測量(株)に委託して実施している。なお、石垣の立面の記録については、より精度の高い三次元レーザー測量を実施し復元可能なデータを残している。なお、石垣より内側の城内は、既に近代以降の擾乱を受けた状態であり、遺構を確認することができなかった。また、石垣や裏込め石の状態から、確認された面よりもさらに1段上が存在したことが想定される。

2. 調査の経過

平成21年10月27日より、作業員を投入しての現地調査を開始した。11月19日に、ポールを使った石垣一段目の空撮測量を行い、翌20日に三次元レーザーによる立面測量を実施している。11月25日には、石垣1段目の撤去作業を実施している。その後、石垣2段目の検出作業を行い、12月1



第3図 平成21年度調査地と試掘確認石垣（1／750）



第4図 寛文7年絵図上での調査位置

小松城跡は、石川県立小松高等学校の校舎改修工事を原因とした調査が4次(平成11年度～16年度)にわたり行われている。新校舎建設区域を対象としており、二の丸内部(利常在城時は三の丸)を調査したこととなる。井戸跡や礎石跡は確認されているが、後世の擾乱や湧水の激しさなどにより、屋敷跡や建物跡の構造を把握することはできない。しかし、本丸側と二の丸に跨る調査区では、堀跡を挟んで、両側の石垣が検出されるなど、城郭構造解明につながる成果が出ている。二の丸側では、約6.5m分が調査され海拔下約2mから、4段分の石垣が検出されている。利常在城時と想定されるが、4段目については「角落し」技法の可能性があり、寛文の地震以後の修復ともみられている。本丸側石垣は基底石のみであるが、南東隅部が検出されている。南北ラインは真北が意識されているようで、切石主体で戸室石の使用が認められている。根石とともに、二の丸基底部と約2mの高低差が認められる。特に、利常在城時以前の遺構が確認されたことが注目される。その頃の小松城の範囲は全く分らないが、少なくとも二の丸部分については、丹羽氏入部以降に造作を受けていることが証明されたわけである。さらに、遺構から加賀焼や珠洲焼が出土していることから、一向一揆勢の小松城やそれ以前の土地利用を想定する必要が出てきている。

また、公園整備工事における立会調査では、三の丸大手部分の堀と石垣の大部分が残存していることが確認された。現在、大手門付近の石垣は、博物館側(東側)の現存部分を除き地上では確認することができない。門西側の石垣も、昭和33年の公会堂建設時に撤去されている。しかし、地中には三の丸大手門から橋へ放射条に延びる取り付け部分の石垣や、橋西側の石垣(東側は崩れている)、対岸の護岸石垣が復元可能なレベルで残存していることは、大きな発見である。小松城の石垣は、城下町小松を特色付けるシンボルであり、今後は保存・活用に方向性をシフトした施策が必要である。

日に2回目の空撮測量を行った。翌2日には、石垣前面の一部たちわりを実施し、最深部の確認を行った。9日に埋め戻しを行い、現地調査を完了した。

3. 出土品整理

出土遺物は、調査年度中に洗浄を、注記・接合・分類・接合・実測作業を平成22年度に調査員により行った。また、トレイス等の報告書作成作業も同様に報告年度に実施したものである。

第3節 既往の調査

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 発見された遺構

1. 確認遺構の概要

今回の調査では、小松城三の丸堀跡とともに、東西南三方向に面する石垣を検出している。石垣以北の三の丸内部については、近代以降の擾乱により乱された状態であり、上面遺構を確認することは不可能であった。現代の下水管管理工事部分を除外すれば、その多くは廃棄土坑である。同じ三の丸でも、茶室建設箇所では、盛土下に遺構が残っており、場所によって遺構の残存状況は様々である。堀内部についても、調査対象深度までは、近現代の建築廃材等を含む土砂で埋め立てられており、遺構とはいえない状況であった。よって、調査はそれら3面の石垣を対象としたものとなった。

2. 石垣

(南面石垣)

全長約11.3m、約2段分の石垣を確認している。上段は、No.3～10が残存しており、No.10より西は既に石が撤去され礫が充填された状態であった。堀が直角に曲がる隅部は、第8図のように破壊されていた。No.11より東側の2石については、石材が不整形の小割り材であり、安定感すらないことから、後世の作造と考えられる。基礎部分の石材も若干の栗石上に載せたものである。確かに、二段目検出時に、東面石垣の前面に残存長約1.7m、幅約1mの栗石が確認されている。しかし、北方向への伸びではなく、周辺のたちわりやポールによる刺突調査でも石垣石材は検出されていない。未調査部分があり、南面石垣がより東方に延びる可能性は完全否定できないが、No.11が一定時期隅部であった可能性は高いと判断される。

石材は、上段にNo.6・7のような比較的幅の広い部材を使用しており、2段目には比較的幅の狭い部材を使用している。奥行きは、部材により様々だが、ブロックごとに合わせてあるようである。積み方は、三浦正幸氏の分類によれば、切込接ぎで布積みと乱積みの中間の積み方となる。各石材は、正面不整形なものが多く、縁取り加工とスダレ加工が施されているのが特徴である。石質は全て凝灰岩であり、本丸櫓台石垣のように戸室石は含まれていない。岩石種は、角礫質凝灰岩で含有角礫は流紋岩・安山岩である。岩石表面に多孔質な面があり、雜色性もあり見かけが悪い。しかし、石英質であることから強度が大で石垣に適した材である。産出地は、八里町・里川町・遊泉寺町・鶴川町・大野町のものが多いようである（以上、関戸信次氏の鑑定による）。主に、小松東部丘陵北側寄りの石切り場から、梯川や鍋谷川水系を利用し運んだものと推察される。1段目と2段目の間には、No.14～16間とNo.19～23間にわたり隙間を埋めるための詰め石が検出されている。明確に鉄石と呼べる状態ではなく、雑に隙間に詰め込んだ感が強い。また、その石の中には、いぶし瓦片も若干混入している。よって、少なくとも1段目構築時には、破碎したいぶし瓦片があった時代であることがいえよう。

栗石は、1段目は幅2.4m程度あり、凝灰岩の破碎片を多く含んでいる。また、幕末以降の造成の影響を多分に受けており、施釉瓦片も多く含んでいる。特に、東面石垣に面した部分は、その護岸位置の変更の影響を受けたものと考えられ、その都度積み直されたものと推察される。2段目は、東面に面した部分以外は、総じて幅を減じており、約1m～2mとなる。凝灰岩の破碎片の割合も減少しており、円礫主体となる。なお、堀込層（Ⅱ層）を確認しており、施釉瓦片を含まないことから、石垣構築時の状態に近いと判断される。栗石の採取地は、白山系の岩石（流紋岩主体）であると鑑定（関戸信次氏による）されたことにより、安宅石ではなく手取川下流域と考えられる。標高2000m以上に源を持つものもあるそうだ。これまで安宅石としていたものも、再検討が必要であろう。

また、たちわりによって、さらに2段の石垣が存在し、合計4段が残存していることが確認されている。3段目は、上2段と同質の加工が施された石材が使用されているが、再下段には正面加工を施

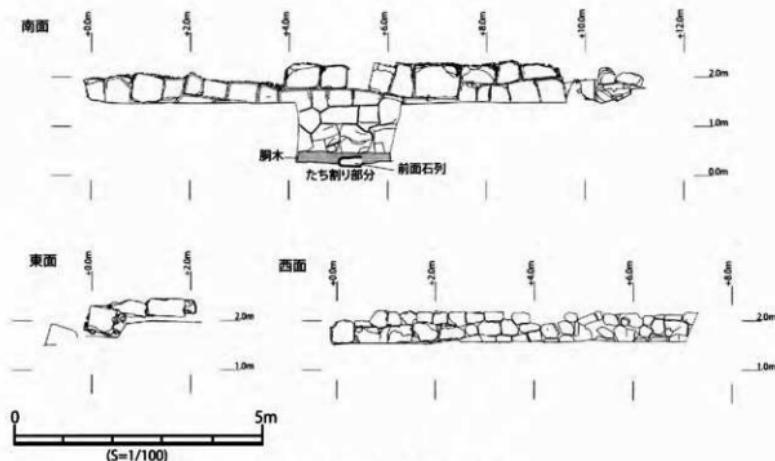


第5図 第1段平面図 (1/100)

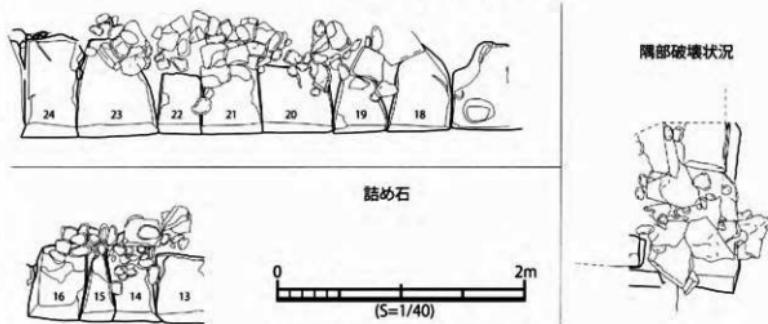
ていない、粗削りの一回り大きな石材を使用している。高さで比較すれば、約40cmの石材を上段に使用し、基礎には約60cmのものを使用している。西から2番目の石材には水抜きと考えられる穴が抜かれていた。石垣構築方法は、丸太胴木を最下底に設置し、その上に基底石として粗加工材を1段設置する。胴木部分で標高0.3mを測る深さからである。その上に精緻な切込接ぎで石材を積み上げていく。その後、正面スダレと縁取り加工を基底石以外に施すものである。湿地で地盤が悪い箇所であり、胴木が設置されるのだが、基底の砂層からではなく、堆積土の腐植層の途中から構築を始めている点に特徴がある。砂層まで掘削すると湧水が激し過ぎたのかもしれない。さらに補強として胴木前



第6図 第2段平面図及び立面座標軸



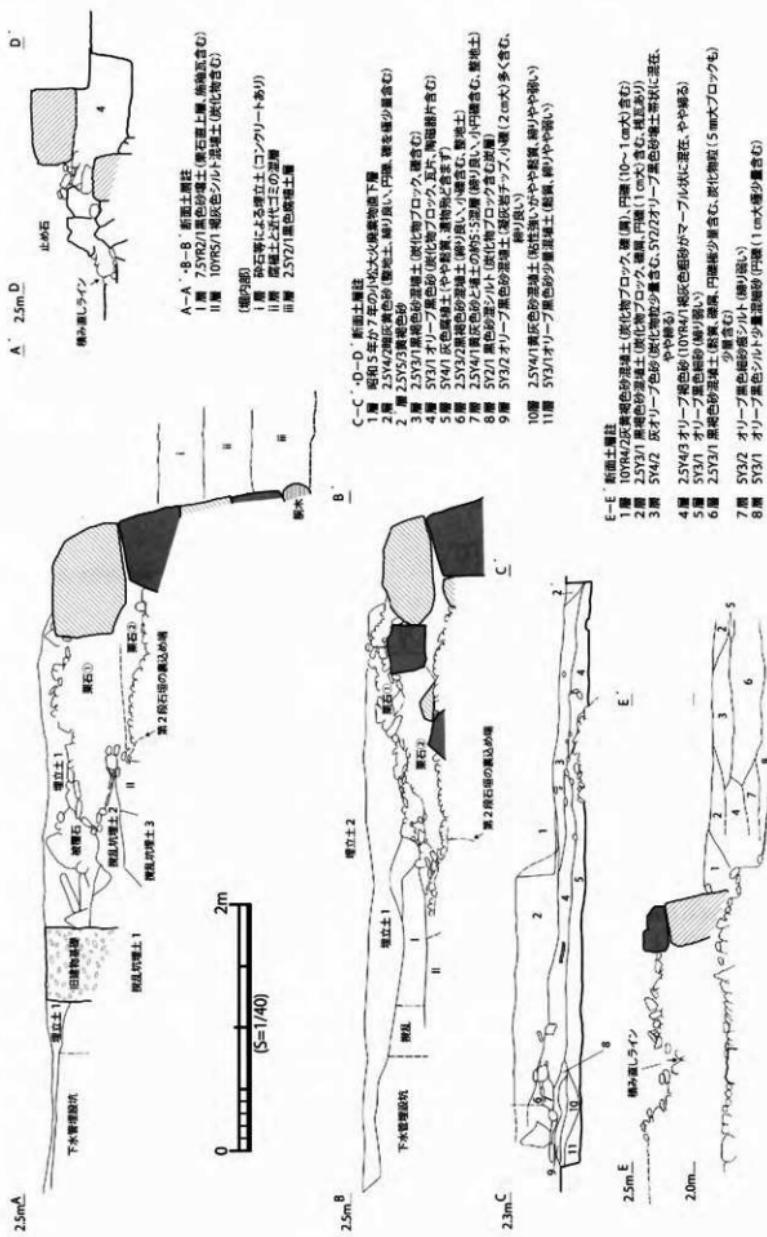
第7図 石垣立面図(1/100)



第8図 南面石垣隅部破壊状況及び詰め石(1/40)

面に約10cmの隙間を開け、長辺70cm×短辺40cm×高さ20cm程度の扁平な凝灰岩の石材を並べ、その隙間に栗石を充填するという補強を行っている。二の丸の調査では、再下段に粗加工材を使う（二の丸は2段分）という特徴は共通するが、角材の胴木で、このような補強は見られない。構築方法の差異は、石工の差、時期差、地盤の差などが想定される。また、下位に粗加工材を使用するという共通項に注目すれば、それを上段は積み直しで時期差だとみる意見もあるが、仮に広範囲で共通して確認できるものであるならば構築方法とみることも可能である。

石垣の構築時期については、前述のとおり絵図には描かれていないことから、考古学的に判断せざるを得ない。ただし寛文7年の絵図には大手付近の石垣は描かれていることから、この頃からあったのかもしれない。実事、県調査検出の二の丸石垣は、寛文期頃（積み直しか）を想定している。ただし、今回の石垣は、石材に縁取り加工を施すという点に着目すれば、金沢城の「6期」宝曆～安永年間（1751～1781）の特徴と合致している。ただし、あくまでも戸室石の場合であり（以上、滝川重徳氏教示）、凝灰岩では決め手に欠けている。その性格は、もちろん護岸の意味であろうが、石材に表面加工を施し、城の正面側に位置することから、見せる要素も多分にあったと考えられる。



第9図 石垣断面図

〔東面石垣〕

東面については、明確な石垣状を呈していない。下部に石材はなく、土の上に設置された状態であった。上位に積まれていた可能性は否定できないので、ここでは石列とはしない。その土の下には、栗石層が検出されており、地盤を固めるためのものか、以前の堀幅を示すのかもしれない。ただし、栗石層前面に石材は確認されておらず、下位にも存在しない。

前述のとおり、1段目の裏込め栗石は、積み直されたものであり、釉薬瓦が混在している。また、2段目のレベルで1m奥まった位置に石列が止め石状に確認されている。栗石の上に載せられたものであり、過去の石垣ラインではない。

東面は何度か修復を受けており、堀幅が変動していたことが考えられる。確認された石垣の時期は、幕末以降のものと推察される。

なお、石列の北方への延長については、4つめの石材が下水管埋設工事においてコンクリート用カッターで切断された状態であったことから、そのまま堀外縁部を縁取るよう続いている可能性も指摘しておきたい。

〔西面石垣〕

全長約7.5m、高さ約0.7m（2～3段分）が確認されている。南面石垣に対して、明らかに付け足したものであり、隅石（No.11）の西辺を基軸として、東西堀を堰き止める状態で構築されている。西面を意識した修景であり、東西掘の方先行して埋め立てられたことを示すものといえる。

石材は、南面石垣より小さく、元々の石垣に使用された石材を小割にしたものと考えられる。しかし、若干石材が異なるという意見もあり、他の場所の石垣の石材の可能性もある。積み方は、南面石垣に似せたものと推察されるが、稚拙なものである。加えて、表面のスダレ加工の方向が一定しないことも、石材の2次利用と考える根拠である。また、石材間の隙間をモルタルで埋めるという難な方法が採られており、芦城公園の西側道路面などの修景石垣の手法と共通している。栗石は、幅0.9m程度あるが、石は疊らであり土砂の方が多い。

この石垣の構築時期については、背面埋土が、昭和5年と7年にあった小松大火における廃棄物（どちらの火事のものは断定できない）で埋められていることから、それらの時期と考えたい。本丸部分で発見された江戸期以外の石垣については、「明治初年の囚人労働による取り壊し時の何らかの造作」の可能性も示されている。しかし、本石垣については、大火跡の片付け時に、南面堀残存部の修景を意識しつつ土止めする目的で設置された可能性が高い。

3. 堀跡及び造成面

三の丸堀部分は、南東隅部を検出している。堀幅については、東西堀で試掘により確認した対岸石垣との幅で、約9m（約5間）を図る。南北堀については、対岸が調査区外なので不明である。三の丸大手では、承応元年（1652）「加州小松城之図」で幅7間とある以上の、約14mの幅の堀が確認されており、隅部は2間ほど狭いものとなっている。堀内埋土については、南側の東西堀部分が標高約1.2mまで建設残土で、東側の南北堀部分が標高1.9mまで小松大火廃棄物で埋められている。両者とも、その当時の事情により、一気に埋められたものと推察される。前述の通り、両者は埋め立て時期が異なることがいえ、特に、前者は昭和7年以降も維持されていたものと考えられる。それは、西面石垣を境に前者埋土に大火廃棄物が全く見られないことからも証明できる。少なくとも、明治初年の囚人労働によって、完全に埋められたものではない。

なお、前者については、純粹に近世の堆積とされるものはⅡ層腐植土層のみであり、長期に渡り維持管理がなされていたものと推察される。Ⅱ層は、近代遺物を含んでおり、囚人労働による破壊に伴う可能性がある。後者では、C-C'において、砂や砂混埴土の造成土（3・4層）が確認されており、時期は含有遺物から幕末頃とみられる。5層は遺物が殆ど含まれない腐植土堆積層であり、この層より上位において幕末時に造成工事を行ったことがいえる。東面石垣はこの造成時の土止めと考えられる。

第2節 出土遺物

1. 陶磁器

遺物は、その殆どが石垣上面の埋土や三の丸側の造成土内及び裏込石上層内からの出土である。前述の通り、擾乱の影響などにより石垣以外の遺構を確認できておらず、一括資料は得られていない。また、堀内埋土についても、調査深度までは殆ど建設歴で埋め立てられている状況から、遺物を層位的に把握することは不可能である。よって、出土遺物全体で量や年代を相対的に把握することで、その傾向を読み取ることにしたい。ただし、その傾向が、同敷地内にある「御番頭御貸家」の様相を反映するところではない。なお、個々の遺物の詳細については、観察表を参照して頂きたい。

組成表は、出土総片から明らかに近現代のものを除外した後のもので、碗・皿・鉢・擂鉢・壺壺類の主要器種について作成している。それぞれ碗 72 点、皿 39 点、鉢 32 点、擂鉢 33 点、壺・壺類 64 点、計 243 点の内訳を示している。小松城跡の一つの傾向として提示するが、中心部である本丸や二の丸では、また異なる傾向が示されることが推察される。

〔碗〕 中世では、中国産の染付碗が 1 点出土したのみである。時期は 16 世紀代とみられる。近世以降は、肥前が主体となる。17 世紀後半からのものがみられ、殆どを占める 18 世紀代のものに主体がある。磁器の割合が高く、陶器は刷毛目と京焼風のものが出土している。11 は、18 世紀前半頃の碗で、コンニャク印判により施文されている。25・26 は、京焼風陶器碗で、25 は底部無釉タイプで見込みに山水文の鉄絵を施す。26 は、高台内に施釉するタイプで、無文である。両者とも外底部に印銘は無く、18 世紀前半頃とされる。18 世紀代の 14 は、高台内銘款が施されている。おそらく「大明年製」の記号化されたものと考えられる。他には、肥前系の波佐見焼もみられる。18 世紀代の碗である 13 は、釉調がくすんでおり、高台外面への掛け方も雑である。見込みには、蛇ノ目釉ハギが施される。19 世紀代には、美濃焼（22）や京・信楽焼（23）のように他産地の製品もみられる。特に、美濃焼の碗は、同じ型式のものが 4 個体分出土している。量的には再興九谷窯製品が主体となるが、肥前も定量存在する。前者では、若杉焼の染付椀（39）等が出土している。後者では、外面青磁内面染付の碗（19）が見られ、見込みに形のくずれた五弁花が描かれる。21 は、焼き接ぎが施されており、外底に焼き接ぎ師の印がある。

〔皿〕 肥前が主体を占めており、同系の波佐見焼も大量伴っている。近世での最古段階である 17 世紀中頃のものが 5 点出土している。5～9 は、いわゆる初期伊万里で、器表面に釉垂れが観察される一群である。5・6 は比較的釉調が良好だが、7・8 は釉調が不安定でややくすむ。7 は幕筒底であり、8 は輪高台である。両者とも強引に織着部分を剥がしているようで、高台疊付に欠けた部分が多い。9 は、輪花皿であり、体部内面にも花卉の表現がある。型打ち整形とみられる。17 世紀後半頃の大皿 10 以降は釉調が良好である。皿については、18 世紀と 19 世紀代とも肥前が主体であり続けているようである。15 は、体部内面の文様に炭ハジキ技法が用いられている。17 は深型の大皿で、低い蛇ノ目凹型高台である。18 世紀でも後半以降であろう。16 は端反皿で、主文様が隙間なく描かれている。両者とも、裏文様が描かれ、焼成時にハリ支えが行われた痕跡が残っている。波佐見焼である 18 は、見込みに五弁花が描かれ、「介」字とみられる高台内銘款が施されている。波佐見焼では、白磁（12）もあり、見込みに蛇ノ目釉ハギが施される。なお、在地の再興九谷窯の製品は殆どない。土師器皿は、小片で団化していないが、体部と見込み部の境に凹線があり、全て近世以降のものである。確認はされた破片には、油煙燈心痕はついていない。

〔鉢〕 17 世紀後半～18 世紀代は、量的に少なく、肥前陶器が確認されるのみである。27 は、二彩か三彩鉢で、灰色ベースに緑色の線が入る。28・29 は刷毛目製品で、特に 29 は緑色釉も使用され二彩的であり、見込みには砂目が残っている。19 世紀以降は再興九谷窯製品で占められ、浅鉢が殆どである。44・45 のように、深さには数タイプあるようで、両者とも底部が非常に薄く整形されている。特に、44 には青緑色釉による二彩的な装飾も施されている。植木鉢は、団化した 42 のような口径 16.6cm のもの他に、口径約 12cm の小型品も存在している。

第2表 出土陶磁器組成表

器種	産地	素材等	釉薬等		時期等	点数	説明	産地	素材等	釉薬等		時期等	点数	
			染付	白釉				内側九谷	磁器	白釉	19C ~			
肥前	中国	磁器	染付	16C	1			在地	土師器	白釉	19C ~	3		
			染付	17C 後 ~ 18C	1			在地	土師器	白釉	19C 後半 ~	1		
			染付	18C 前	2			不明	磁器	白釉	19C 後半 ~	2		
			染付	19C	17			合計			計	3		
			四形輪	18C	1						合計	39		
		外青磁内染付		19C 後半 ~ 19C	1			肥前	陶器	刷毛目	17C 後 ~ 18C	5		
				17C 後 ~ 18C	4					(三) 彩	17C 後	1		
	陶器	京焼模		18C 前	4					計		6		
				計	35					色絵	19C ~	1		
筑	波佐見	磁器	染付	16C ~	2					模	浅鉢	19C ~	20	
			染付(口紅)	端反輪	19C	4				模木鉢	19C ~	5		
			青磁	四形輪	19C	1				計		26		
			染付	若杉	19C	1				合計		32		
				19C ~	3				越前	16C	1			
	再興九谷	磁器	染付	19C ~	14					波・網輪	19C ~	12		
			白磁	环	19C ~	1				網輪		1		
				計	19					備前系		1		
	不明	磁器	染付	端付	19C 後半 ~	1				波・網輪		7		
			青磁	白磁	19C ~	1				網輪		11		
田	波佐見	陶器	ビラ掛綱		1					合計		33		
				計	8					床圓	陶器	大唐	13C 後 ~ 14C	3
				合計	72					波・網輪	19C ~	2		
				17C 中	2					陶器		17C 後 ~ 18C 初	1	
			染付	17C 後 ~ 18C	12					計		3		
	肥前	磁器		18C	12					肥前	波・網輪		10	
				19C	8					磁器	青磁・口磁	19C ~	16	
	波佐見	陶器	染付	18C 後 ~ 19C	3					青磁	波・網輪	19C ~	24	
			白磁	18C 前	1					陶器	波	水盤	19C ~	4
				計	4					計		44		

【捕鉢】 中世のものは、16世紀代の越前焼（2）がある。卸目原体は比較的狭く6本程度である。外面に整形台から外す際に、紐を掛けて引いたと時に付いたとみられる痕跡が残っている。近世は、17世紀後半～18世紀代は肥前、19世紀代は再興九谷窯製品が主体を占める。30・31は、17世紀後半頃のもので、無台で卸目が密に施されている。31は、体部下端から底部にかけて銷軸が塗布されている。32は、しっかりと貼付高台を持つもので全面施釉されている。卸目の摩耗が激しく、よく使用されている。18世紀前半の製品である。18世紀後半のものは、口縁部を肥厚させ外反させる33などが出土している。他の産地としては、備前系（34）や須佐（35）が出土しており、前者は17世紀後半～18世紀前半、後者も18世紀代に収まるものと推察される。再興九谷窯製品は、口縁部を肥厚させ外反させるもので、口縁部内部から体部下半まで鉄軸を掛け、それ以下と内面は銷軸を施すもの（40・41）である。卸目は細く非常に密である。

【壺・甕】 中世では、珠洲中壺（1）と越前焼甕（3と未図化）がある。1は、口縁部形態から吉岡編年Ⅲ～Ⅳ期頃と考えられ、出土遺物では最古の年代である。3は、メンコ状に成形されたものである。近世以降は、肥前製品が定量みられるが、19世紀以降はやはり再興九谷窯製品が主体となる。ただし、38は、17世紀末～18世紀初頭頃の近世越前焼の小壺で、内外面に塗鉄している。再興九谷窯では、小型の壺（46）や甕（47）の他、片切形で体部外面に文様を施す水甕（48）などがある。【その他の遺物】 20は肥前の碗蓋で、見込みにサギ文が描かれている。49・50は行平鍋で、蓋の口縁部と身の火に掛ける体部外面下半は無釉である。50には、列点文の装飾が施されている。52は徳利で、類似品が現存しており、醤油販売用のものと考えられる。銘から「本店」から納入されたものであろう。53～56は陶鍊であり、確認された三法量を図化した。56はその融着した塊である。58は、駒状の土製品で、提灯を模しており、中央円筒内に「大」の文字がある。59・60は、上繪付け窯の内窓の破片である。径は63cm程度に復元される。特に、60には棚板を載せた突起が残存している。幕末陶磁器・瓦を含む造成土内や、東面石垣背後の裏込石内から破片が散布して出土しており、幕末頃の時期が推察される。なぜこのような遺物が出土したのか興味深いところであり、上繪付け職人が付近に存在したのであろうか。小松の産業史にとっても重要な発見となった。

2. 瓦

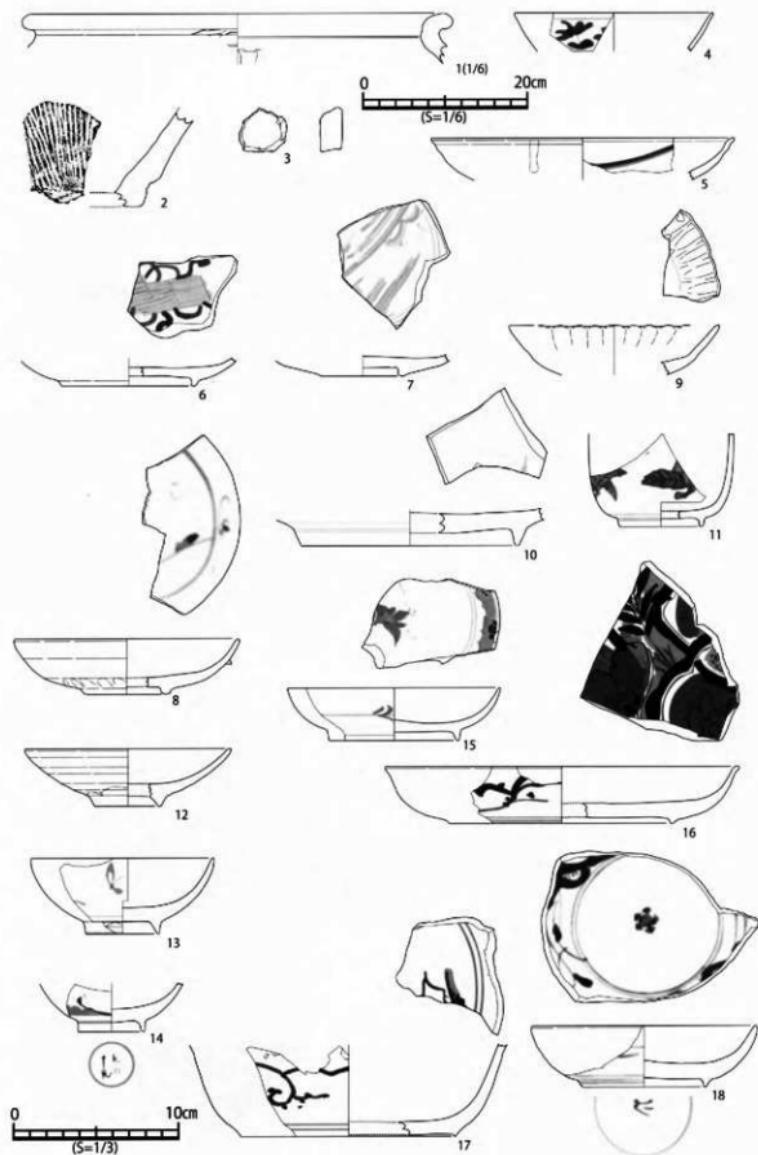
瓦は、陶磁器について多く出土した遺物である。いぶし瓦が169点と最も多く、釉薬瓦は鉛釉の赤瓦が76点、黒釉瓦が72で拮抗している。出土地点についてみると、いぶし瓦と赤瓦は裏込め上層内から半数以上出土している。石垣の構築や修築、その他の土木工事によって流入した可能性を考えられ、江戸時代の遺物である可能性は高いといえよう。おそらく、三の丸にあった「土屋敷」や「御番頭御貸家」などに付随したものではなかろうか。しかし、黒釉瓦は約半分がB-2 G rの裏込め石より上位の土層より出土しているため、前二者より新しいもので、廃城以後のものである可能性が高い。

〔いぶし瓦〕 全169点の内、120点が平瓦である。軒丸瓦（1・2）は少なく3点の破片のみである。瓦頭文様は、1が三巴文、2が梅鉢紋である。3は軒平瓦で、瓦頭文様は均等唐草文と推察される。4～8は丸瓦で、全て玉縁式である。全長は不明だが、幅は13.7cmを測る。10・11は平瓦で、これも全長は不明で、幅は高端側残存長で18.6cmを測る。小松城では全形のわかる資料はないが、広坂遺跡を参考にすれば、21～25cm程度であろう。これらのいぶし瓦の供給先については、日末瓦窯跡と蓮代寺瓦窯跡であると考えられる。1は三巴文、2は梅鉢紋と蓮子の形態から蓮代寺瓦窯跡産とみられる。4～8も、玉縁が短く、凹面の内叩き痕跡がみられないことから蓮代寺瓦窯跡産であろう。平瓦は、10は重厚な作りで、凸面が平滑に仕上げられている。狭端部側面に「上」の刻印があることから日末瓦窯跡産に比定可能である。11は、薄手の作りで、凸面にケズリ調整痕が残る。凹面の調整台痕跡から蓮代寺瓦窯跡産と考えられる。

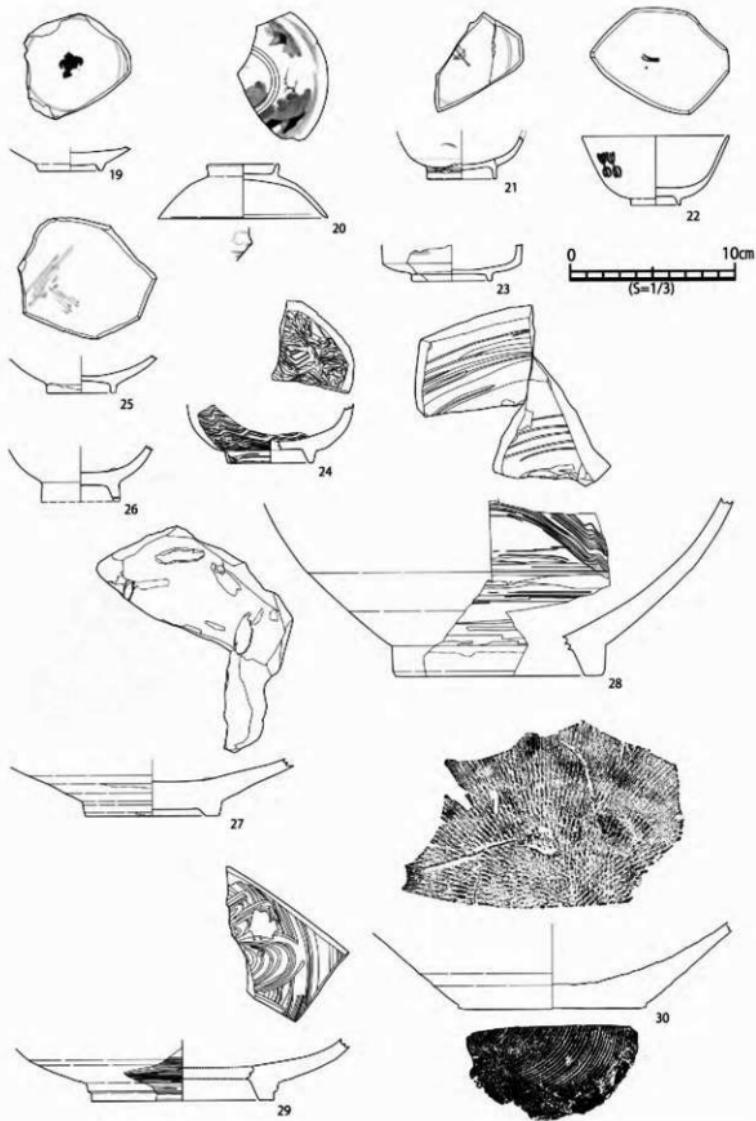
〔釉薬（赤）瓦〕 若干の軒棟瓦片を判別できていない可能性はあるが、出土量の多くを占めるのは棟瓦である。11は軒棟瓦の軒丸部であり、三巴文が配される。5は、軒丸瓦を釉薬塗布前に切ったもので、直径16.8cmを測る。蓮子と三巴文が配され、丸瓦部凹面には内叩き痕跡が残っている。内叩きは、いぶし瓦の日末産にみられた技法である。15・16は、軒棟瓦の軒平部で、均等唐草文が配される。18は丸瓦で、玉縁式で凹面に打ち叩き痕が残っている。19も丸瓦と考えられるが、行基書き型式で、他の赤瓦より胎土も粗く質質である。特殊品の可能性がある。21・22は熨斗瓦で、基本的に割り熨斗である。割り筋を付けた段階で施釉され割られたものである。ただし、22が全面施釉のため、割ったのは焼成後とは限らないようだ。25・26は、方形に近い特殊瓦である。27も有段の特種瓦である。全長25cm・全幅21cmを測る。両者は熨斗瓦として使用されたものであろうか。なお、22・25・27には「八」の刻印がある。これらの赤瓦は、「八」の刻印や、光沢のない釉調や砂粒が少なく締りの好い胎土特徴から、19以外は、19世紀前葉の越前赤瓦系の八幡窯産と考えられる。

〔釉薬（黒）瓦及び他の製品〕 出土内訳では、黒釉瓦でも棟瓦の比率が高い。17は、軒棟瓦の軒平部とみられる。中央に三巴文が施されており、釉薬は薄い。二次比熱による変質の可能性がある。20は玉縁式の丸瓦で、玉縁部分は無釉である。凹面叩き技法は採られていない。23・24は熨斗瓦で、全長23.5cm・幅10.0cmを測る。割り筋に沿って割られたもので、割れ面は無釉である。釉調は光沢のあるもので、幕末以降の在地産の瓦と考えられる。13・14は、軒丸瓦の一部と考えられ、瓦頭文様は文字とみられる。釉調は、やや透明感や光沢があり茶褐色に発色するものである。この透明感のある釉の破片は他にもあり、他の在地産とされる一群に対して異質である。

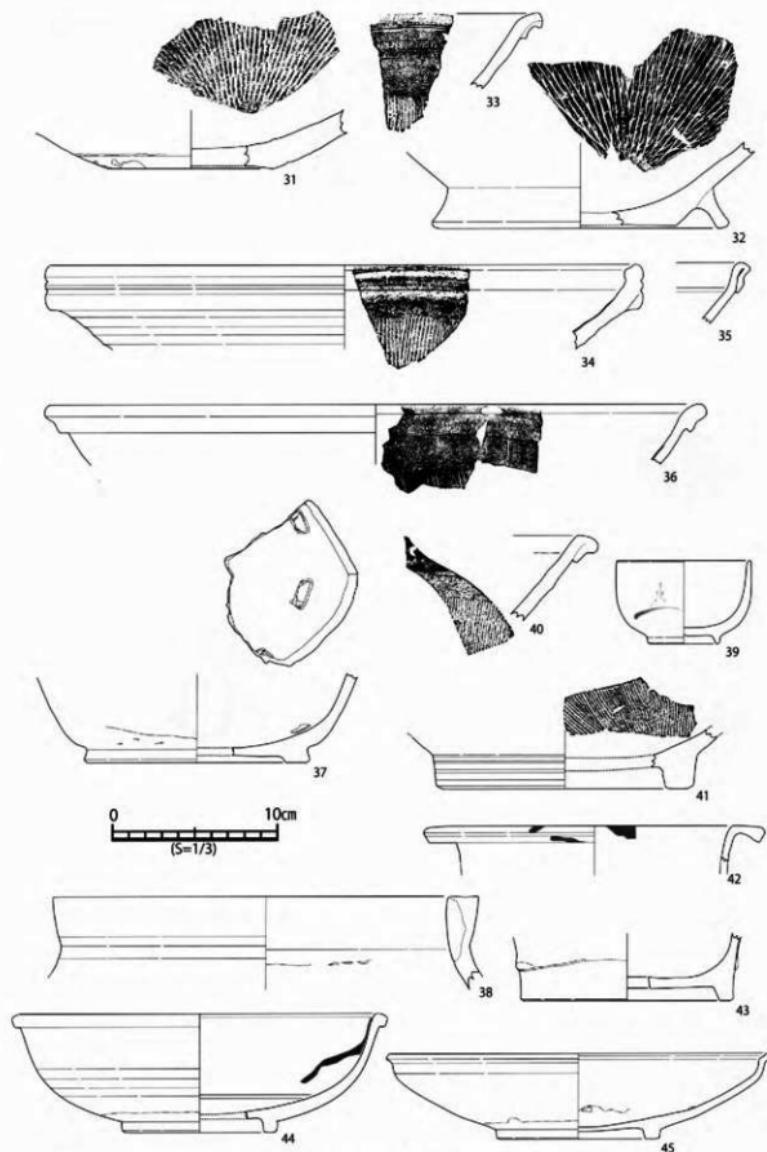
〔刻印について〕 「上」・「と」・「一」がいぶし瓦、釉薬（赤）瓦は「八」のみ、「一」が灰釉的な色合いのもの、山形と「キ」と旗のような記号が釉薬（黒）瓦のものである。いぶし瓦の「上」は、類例により日末窯産と特定されている。「と」については、「上」と同種の胎土、焼成状態であるところから日末窯産とみられる。「一」は、丸瓦凸面に刻まれたもので、凹面の叩き痕がないことから、蓮代寺窯産と考えられる。釉薬（赤）瓦の「八」は八幡窯産で、棟瓦・熨斗瓦・特殊瓦の端面に施されている。灰釉風と黒瓦については、产地の特定はできない。



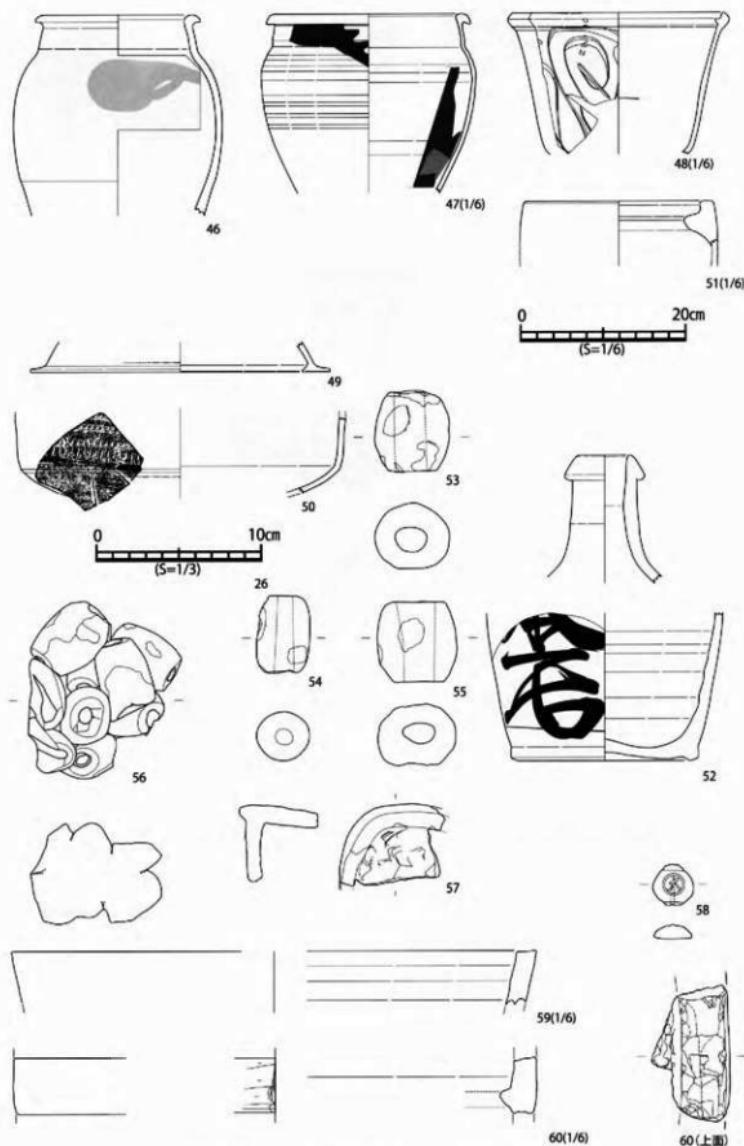
第10図 出土陶磁器 (1/3・1/6)



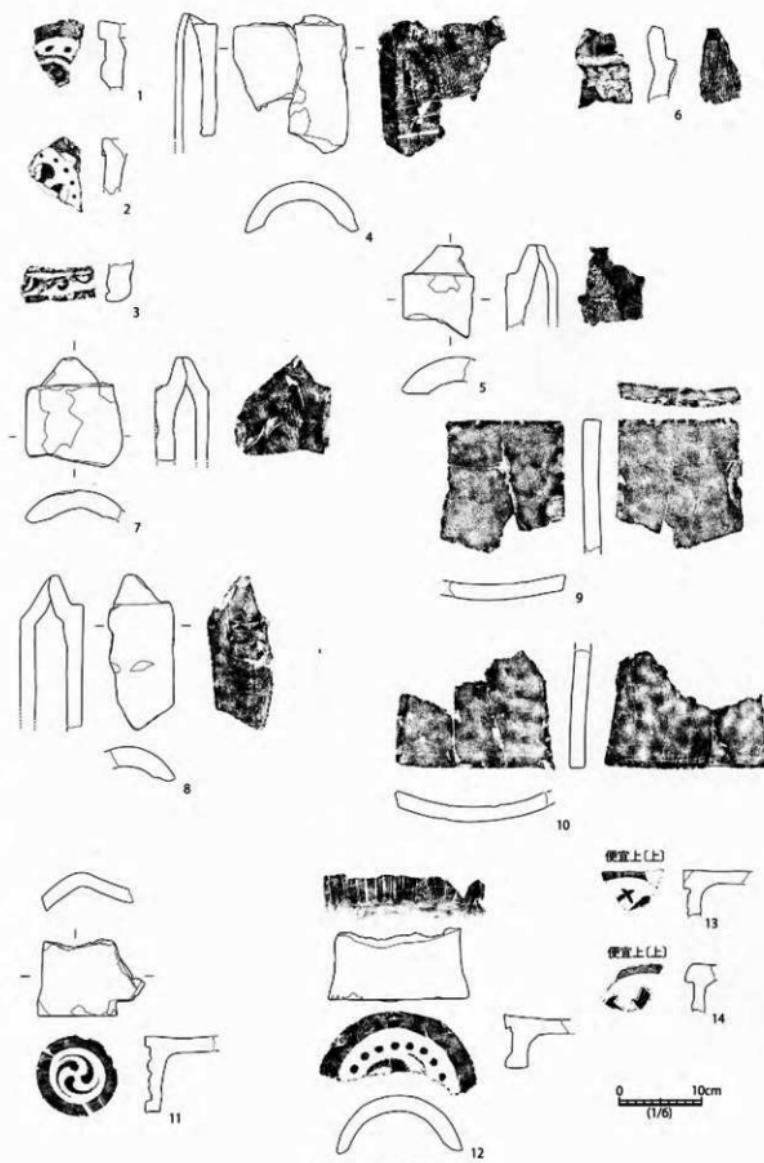
第11図 出土陶磁器 (1/3・1/6)



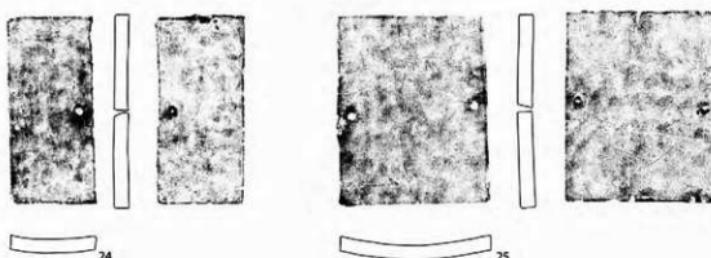
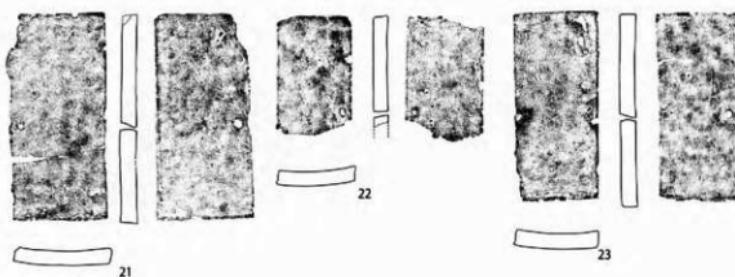
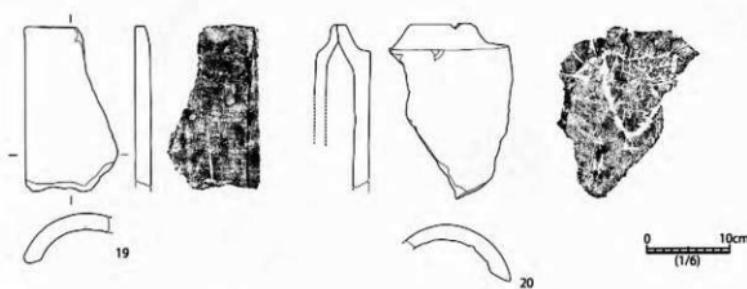
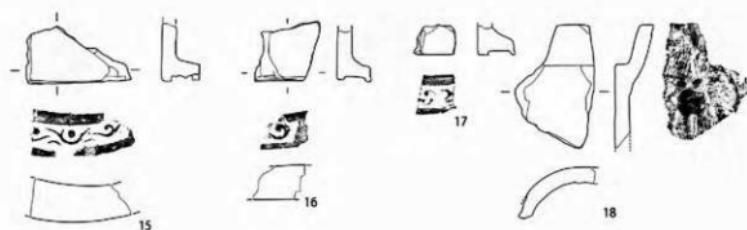
第12図 出土陶磁器 (1/3 + 1/6)



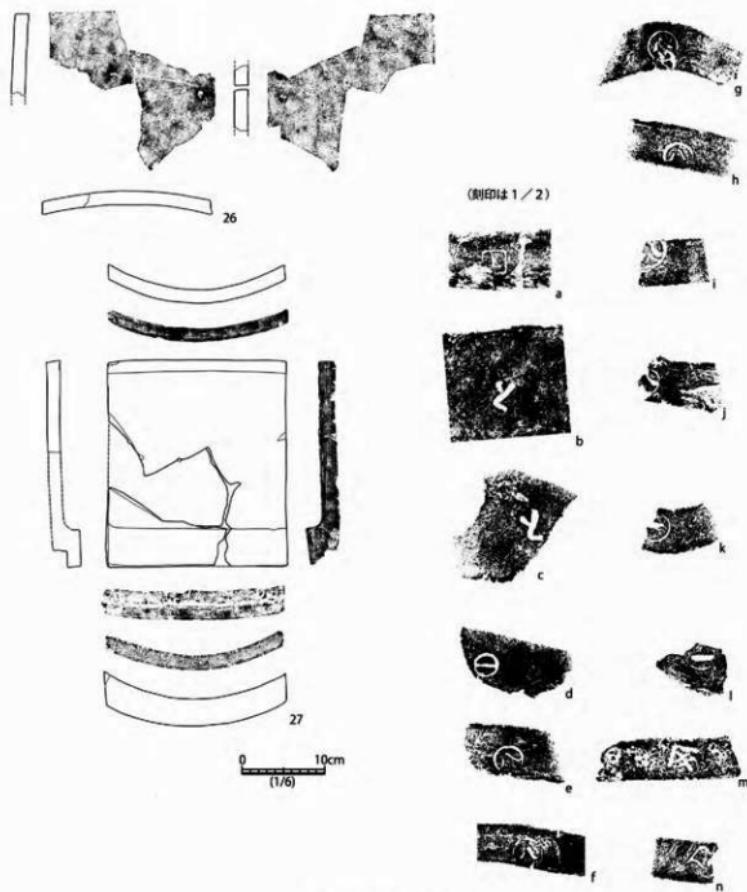
第13図 出土陶磁器、石製品、土製品 (1/3・1/6)



第14図 出土瓦 (1/6)



第15図 出土瓦 (1/6)



第 16 図 出土瓦 (1/6)

第3表 出土瓦種別構成表

いぶし瓦	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦	特種品	合計
破片数	3 1.8 %	1 0.6 %	38 22.5 %	120 71.0 %	7 4.1 %	169
構数 (○ / 4)	0 0.0 %	0 0.0 %	10 29.4 %	23 67.7 %	1 2.9 %	34
釉薬瓦 (赤)	軒棟瓦	軒丸瓦	丸瓦	棟瓦	熨斗瓦	特種品
破片数	3 3.9 %	0 0.0 %	4 5.3 %	61 80.3 %	6 7.9 %	2 2.6 %
構数 (○ / 4)	1 2.6 %	0 0.0 %	1 2.6 %	23 59.0 %	10 25.6 %	4 10.2 %
釉薬瓦 (黒)	軒棟瓦	軒丸瓦	丸瓦	棟瓦	熨斗瓦	特種品
破片数	1 1.4 %	1 1.4 %	11 15.3 %	57 79.1 %	2 2.8 %	0 0.0 %
構数 (○ / 4)	0 0.0 %	0 0.0 %	2 11.1 %	12 66.7 %	4 22.2 %	0 0.0 %

第4表 出土陶磁器観察表

番号	出土地点	器種	色調	素材等	釉薬等	口径	高さ(高台径)	見込み高	産地	備考(時期等)	
										底径	腹径
1	C-1Gr 造成土内	縦	灰白	陶器		50.2			亚洲	田~W期、内面叩き痕	
2	C-1Gr 造成土下層	縦	にびい黄褐	陶器					朝前	16C、外腹に紐外し痕	
3	C-1Gr 造成土下層	メンコ吹	灰白	陶器					朝前	16C、2.7×横3.0cm	
4	C-2Gr	小碗	灰白	陶器	染付	12.0			中国	16C	
5	C-2Gr 墓込石内	壇皿	灰白	陶器	染付	18.4			肥前	17C中、軸垂れあり	
6	C-1Gr 造成土内	皿	灰白	陶器	染付		8.0		肥前	17C中、垂付のみ露胎	
7	C-2Gr	皿	灰白	陶器	染付		5.0		肥前	17C中、垂付、露付のみ露胎	
8	C-2Gr アゼ	皿	灰白	陶器	染付	13.5	3.5	4.5	(2.4)	肥前	17C中、垂付のみ露胎、釉垂れあり、垂焼絞り片付
9	西面石垣埋土	輪花皿	灰白	陶器	染付	12.8			肥前	17C中	
10	西面石垣内	皿	灰白	陶器	染付		13.2		肥前	17C後半、垂付のみ露胎、内底部円凹	
11	B-1Gr	縦	灰白	陶器	染付		4.9		肥前	18C前半、コンニャク印判、垂付のみ露胎、内底部円凹	
12	C-2Gr	皿	灰白	陶器	白磁	12.4	3.5	4.2	(2.1)	波佐見 18C前半、蛇ノ目鉢ハギ、高台外腹以下露胎	
13	B-2Gr 7t 墓込石内	縦	灰白	陶器	染付	11.0	4.6	4.4	3.0	波佐見 18C、蛇ノ目鉢ハギ、垂付のみ露胎だが施釉無	
14	B-1Gr	縦	灰白	陶器	染付		4.0		肥前	18C、垂付のみ露胎、高台内露胎	
15	C-2Gr アゼ	皿	灰白	陶器	染付	12.8	3.2	7.7	2.0	肥前 18C、垂付のみ露胎、外底ハリ痕、墨ハジキ接法	
16	B-2Gr	縦反縦	灰白	陶器	染付	21.4	3.5	13.6	2.2	肥前 18C、垂付のみ露胎、外底ハリ痕	
17	B-2Gr	皿	灰白	陶器	染付		13.0		肥前 18C、蛇ノ目凹形高台		
18	B-2Gr	皿	灰白	陶器	染付	13.6	3.75	7.4	2.2	波佐見 18C後半~19C前半、高台内露胎、外底秒目	
19	C-2Gr 墓込石内	縦	明月-7 灰	陶器	青磁		3.8		肥前	18C後半~19C前半、内面染付、垂付のみ露胎、高台内秒目	
20	東面石垣下土	縦	灰白	陶器	染付	10.6	3.3	4.3	2.5	肥前 19C、つまみ縄部のみ露胎	
21	B-2Gr 7t 墓込石内	縦	灰白	陶器	染付		4.0		肥前	19C、垂付のみ露胎、瘦縄巻ぎ(外底に印)	
22	C-1Gr	縦	灰白	陶器	染付	8.8	4.2	3.0	3.1	美濃 19C、垂付のみ露胎、口紅	
23	C-2Gr 7t アゼ	筒型碗	FF-7 灰	陶器	青磁		4.7		豈・信楽 19C、外底以下露胎、外腹染付あり		
24	C-1Gr 造成土内	縦	灰白	陶器	刷毛目		5.0		肥前	17C後半~18C、垂付のみ露胎	
25	C-1Gr アゼ	縦	浅黄	陶器	京焼風		4.2		肥前 18C前半、高台外腹以下露胎		
26	B-2Gr	縦	浅黄	陶器	京焼風		(4.8)		肥前 18C前半、高台内施釉、見込み粒狀物多数		
27	C-2Gr 墓込石上	縦	浅黄	陶器	灰釉		8.0		肥前	17C後半、高台内施釉、見込み粒狀物多数	
28	C-1Gr 造成土内	縦	灰	陶器	刷毛目		12.6		肥前	17C後半~18C、高台外腹以下露胎	
29	裏込石下層	縦	赤灰(外 底以下)	陶器	刷毛目		10.0		肥前	17C後半~18C、垂付以下露胎、二彩、見込み砂目	
30	C-2Gr	縦	赤褐	陶器			11.4		肥前	17C後半~18C、底部圓軸系切	
31	B-2Gr	縦	赤褐	陶器	灰釉		9.0		肥前	17C後半、体部下端~底部施釉、底部砂目	
32	B-2Gr 墓込石上	縦	赤褐	陶器	灰釉		18.0		肥前	18C前半、高台内面砂目	
33	B-2Gr	縦	赤褐	陶器	灰釉				肥前	18C後半	
34	C-2Gr 墓込石内	縦	赤褐	陶器	灰釉		35.6		備前系	17C後半~18C?	
35	B-2Gr 墓込石内	縦	にびい赤褐	陶器					須佐	17C後半~	
36	C-1Gr アゼ	縦	赤褐	陶器	灰釉		39.5		不明	時期不明、肥前系の産地	
37	西面石垣埋土	縦	灰白	陶器	灰釉		13.8		不明	17C後半~、見込み船形目、上野・高取か?	
38	C-1Gr	小盤	にびい	陶器	鬼板	25.8			越前	17C初頭	
39	C-1Gr	縦	灰白	陶器	染付	7.5	5.1	4.0	4.1	若杉 19C、垂付のみ露胎	
40	東面石垣下土	縦	灰	陶器	鉢輪				再九谷	19C、内面露胎	
41	B-2Gr	縦	にびい	陶器	鉢輪		15.6		再九谷	19C、外底以下と内面露胎	
42	C-1Gr 造成土内	縦木鉢	灰灰-7	陶器	灰釉	16.6			再九谷	19C、二彩	
43	B-2Gr 7t 墓込石内	縦木鉢	浅黄	陶器	灰釉		12.8		再九谷	19C、外底以下と内面露胎	
44	C-2Gr 墓込石下	洋鉢	灰	陶器	灰釉	21.8	7.2	8.4	(6.1)	再九谷 19C、体部下端以下露胎、青磁輪による二彩	
45	C-1Gr	洋鉢	FF-7 灰	陶器	灰釉	22.8	5.2	9.9	4.5	再九谷 19C、体部下端以下露胎	
46	B-1Gr	小盤	灰	陶器	灰釉	8.9			再九谷	19C、二彩風、体部下端にケズリ	
47	B-1Gr	小盤	灰灰-7	陶器	灰釉	22.1			再九谷	19C、二彩、口縁部に妙輪裏	
48	C-2Gr アゼ	水盤	灰灰-7	陶器	灰釉	25.4			再九谷	19C、外腹片切彫りによる文様	
49	C-2Gr アゼ	行平鍋	灰	陶器	鉢輪	18.2			不明	時期不明、口縁部以外施釉	
50	C-1Gr 造成土内	行平鍋	灰	陶器	鉢輪				不明	時期不明、体部外腹下半露胎、内面露胎	
51	東面石垣埋土	七輪?	浅黄	陶器	鬼板	20.6			不明	時期不明	
52	南面石垣埋土	雅利	灰白	陶器	灰釉	3.0		11.4	不明	近代、普道便利、墓込石内からも出土	
53	D-2Gr アゼ	南面	陶器	自然釉					在地?	幅4.5cm	
54	Jr-B4	南面	にびい	陶器	自然釉				在地?	幅4.8cm	
55	Jr-C14	南面	灰	陶器	自然釉				在地?	幅4.8cm	
56	B-2Gr	南面	にびい	陶器	自然釉				在地?	難着品	
57	C-2Gr 墓込石内	行火	灰白	石製品					在地	骨、凝灰岩製	
58	B-2Gr	玩具?	浅黄	土製品					不明	蝶形、長2.5・幅2.5・厚0.9cm	
59	C-2Gr	内窓	浅黄	土製品		63.5			上繪付け窓の内窓		
60	C-1Gr 造成土内	内窓	灰	土製品					上繪付け窓の内窓、稚板兼せ突起あり		

() 内は復元想定値

第IV章　まとめ

第一に出土陶磁器の様相からみると、三の丸南東隅では17世紀前半の遺物を見出すことはできない。それ以前の16世紀代の遺物は少量あるが、流入の域をでない。17世紀中頃から出土し始め、18世紀代は定量出土し、18世紀後半から増加傾向に転ずる。その後幕末・明治以降にわたり出土している。つまり、三の丸付近の土地利用は、寛永16年（1640）に前田利常が入城した以降であるといえる。それまでの小松城は、通説どおり本丸周辺のみの範囲だったとみられる。また、明和8年（1771）から文久3年（1862）までの、小松城において城代が廃止されていた時期に遺物量が増加しており、三の丸の利用が活性化している点は興味深い。次に金沢城と大聖寺の様相と比較してみたい。金沢城では、当然17世紀前半の遺物があり、擂鉢において肥前に主体がありつつも越前焼がもっと多いそうだ。大聖寺では、むしろ越前焼が最も多く、消費の主体となっている。大聖寺藩と距離的に近い小松城跡の今回の調査において、近世越前焼擂鉢は見つかっていない。しかし、出土地点が限定されたため、城下町の大川遺跡の調査結果など類例を持って様相差異を議論していくたいと思う。

第二に南石垣の構築時期については、今回石垣の積み方と石材の正面加工の方法から、利常在城時期より下る可能性を指摘した。金沢城と技術的共通性を同時期性と認めるなら、6期宝曆～安永年間（1751～1781）となる。まさに遺物量が増加傾向に転ずる時期といえよう。石垣最上段の裏込石内にいぶし瓦や赤瓦片が多く含まれる点については、東側護岸の度重なる修築や造成工事による影響が第一要因といえ、江戸時代末期の修築や廃城に伴う解体廃棄物処理に伴う可能性は高い。また、城内では、いぶし瓦と赤瓦葺の建物が並存していたと考えられ、同時に混ざり込むことは十分考えられる。しかし、南面石垣石材の隙間に挟まっているのはいぶし瓦片のみであり、赤瓦も19世紀前葉の八幡窯産にほぼ限定されるため、そこまで下ると考えられない。また、陶磁器の様相から、いぶし瓦の時期を利常入場よりも前に求めるべきである。また、絵図において、承応元年（1652）絵図では、三の丸はまだ「大手」とのみ表現されており、二の丸が三の丸であった。利常死後の寛文7年（1667）絵図で、三の丸と表記されるようになる。さらに、この絵図から大手門と付近の石垣が表現され、この二つの絵図は三の丸の整備が遅れたことを示唆している。このような情勢の中で、三の丸周辺の護岸石垣が遅れて整備されたのではないか。ただし、調査が最上段のみに限定されており、修築の可能性も残るため、断定することは控えたい。

最後に、今回の石垣は残存する絵図には表現されていなかったもので、新たな発見となった。絵図は、幕府に提出するものであり、軍事施設である石垣は報告が必要だったはずだが、表現されなかつた理由は何であろうか。軍事的に重要ではなく、地盤の弱い地での護岸目的のものは報告する必要がなかったのであろうか。どちらにせよ、まとまった調査の乏しい小松城跡において、今回の調査及び発見は、多くの新知見をもたらす貴重なものといえよう。今後小松城跡の実態解明には、新修小松市史1「小松城」の成果に、建築史や考古学及び歴史地理学などを加えた学際的総合研究が必要不可欠である。

今回の報告において、藤田邦雄氏から特に出土陶磁器の様相において、多くのご教示を頂いている。末筆ながら、記して感謝申し上げる次第である。

参考文献

- 新修小松市史編集委員会 1999 「新修小松市史資料編 1 小松城跡」 石川県小松市
- 新修小松市史編集委員会 2001 「新修小松市史資料編 3 九谷焼と小松瓦」 石川県小松市
- 石川県教育委員会・(財)石川県立埋蔵文化財センター 2007 年『小松市小松城跡』
- 久保智康 2005 「第1章日本海をめぐる赤瓦」「日本海歴史体系第4巻近世編I」 清文堂
- 庄田知充 2005 「第2章近世日本海沿岸地域における擂鉢の流通」「日本海歴史体系第4巻近世編I」 清文堂
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- (財)瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター 2006 『江戸時代の焼物 生産と流通』 資料集



南面石垣全景



南面2段目検出面



東面石垣



南面石垣東側近影



一段目断面



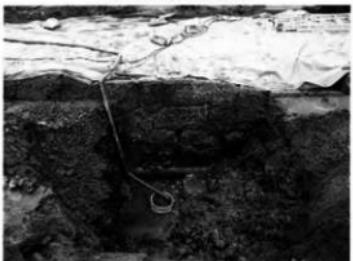
隙間石の様子



1段目裏込石除去後



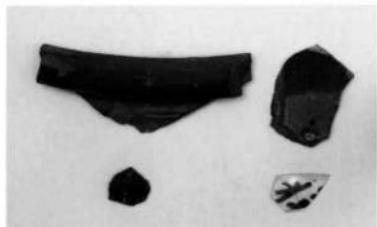
石垣2段目全景



たちわりの様子



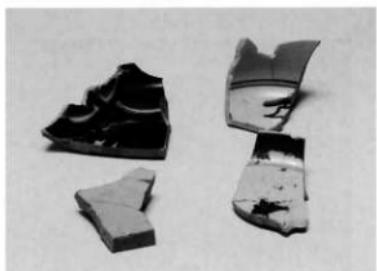
三の丸大手門石垣



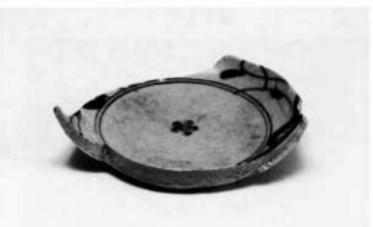
中世(1~4)



肥前(5~9)



肥前(10-15~17)



波佐見(18)



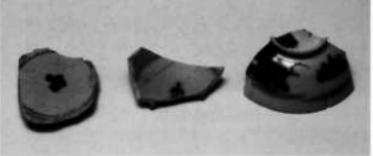
肥前(13-14-11)



波佐見(12)



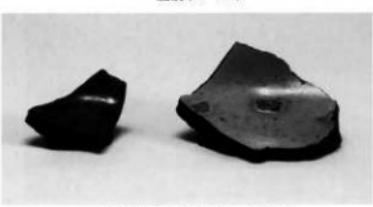
肥前(19~21)



美濃(22)、京・信楽(23逆位)、若杉焼(39)



肥前京焼風陶器(26・25)



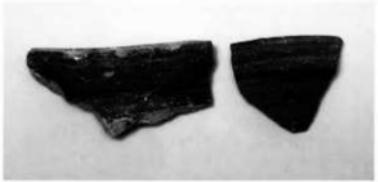
肥前刷毛目(24)、産地不明(31)



肥前(27~29)



肥前(32~33)、須佐(35)



越前(38)、備前系(34)



再興九谷(40~45)



陶鍤(53~56)



再興九谷(46~48)



行火(57)



土製品(58)



上繪付窯(内窯59~60)





いぶし瓦 軒丸瓦(1)



いぶし瓦 軒丸瓦(2)



いぶし瓦軒平瓦(3)



釉薬瓦(赤) 軒桟瓦(11)



いぶし瓦 丸瓦・平瓦(8・7・4・10・9)



釉薬瓦(赤) 軒丸?瓦(12)



釉薬瓦(黒) 軒桟瓦(13)



釉薬瓦(赤) 特殊瓦(25-27)



釉薬瓦(赤) 軒桟瓦(15)



釉薬瓦(赤) 軒桟瓦(16)



釉薬瓦(赤) 瓦斗瓦(21)・丸瓦(19-18)

小松城跡発掘調査報告書

平成 23 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町 91 TEL (0761) 24-8132

印 刷 蘭川印刷株式会社
石川県小松市河田町丁 33 TEL (0761) 47-0188
